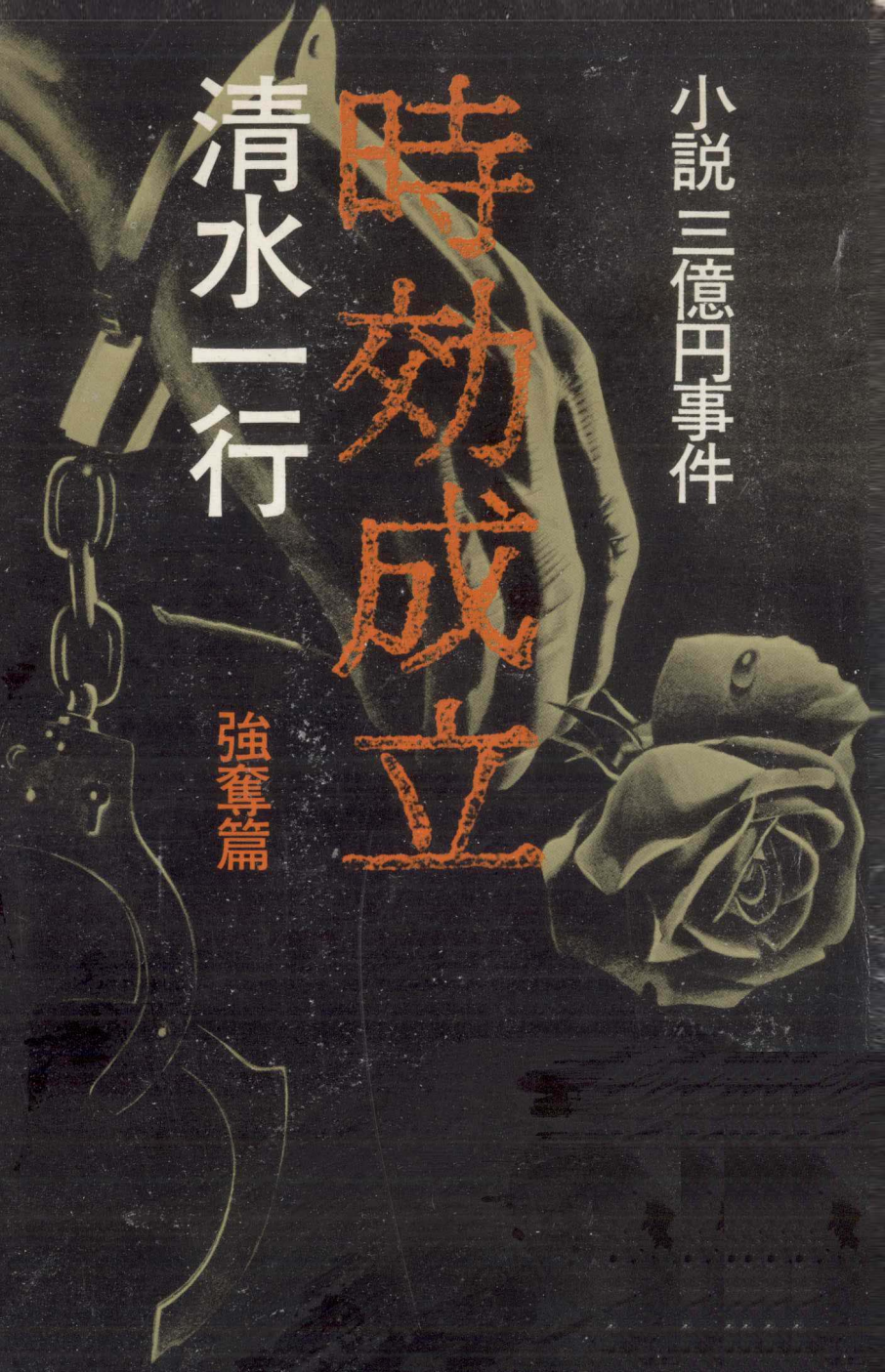


小説三億円事件

清水一行

時効成立

強奪篇

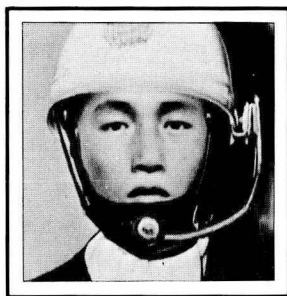


小説三億円事件

時効成立

清水一行

強奪篇



講談社

© 1975

IKKÔ SHIMIZU

第1刷 昭和50年11月28日

時効成立 強奪篇

著者 清水一行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

郵便番号 112

振替東京3930

Printed in Japan

落丁本・乱丁本は
お取替え致します

電話東京(945)1111(大代表)

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 株式会社国宝社

定価はカバーに表示してあります(文2)

時効成立
強奪篇
目次

運び出し	7
種つけ業	20
外だま、内だま	31
浮気はさせない	43
まとまった金	55
脅迫状	66
予告の放火	76
擱む方法	87
現金の径路	99
白バイだ……	111
食い違い	122
東芝府中工場	133
四本のタコ足	144

闇の共鳴
灰色の塀
潮の加減
結婚
思いつき
浮気の虫
計画変更
最後の準備
豪雨
雷鳴
幸運
被害額三億円

279 268 257 246 235 224 212 201 187 177 166 155

装幀 福田隆義

時効成立
強奪篇

運び出し

一

あの女……。

いま頃は、昨夜から今朝にかけての、狂い乱れた婆など忘れたなに食わぬ顔で、自分の家の台所に立ち、登校する子供たちのため、せわしげに朝食の支度をしているのかもしれない。そう思うと腹立たしかった。

サービスさせられただけの西原としては完全な見込み違いであった。

「二十九日の夜、電話してみてよ」

一週間前に、女の方から意味ありげに切り出したのだった。もちろん、西原房夫が計画している畜犬業に出資する話のつづきとしてであった。

運び出し
「夜……ですか」

「うちの人出張だし、ゆっくり話ができるでしょ」

出張。

西原はそうかと思った。

犬を愛玩するようになった、ある種の中年女の扱いは、彼女たちが、夫以外の若い男、たとえば西原のような体力のある男たちに、なにを期待し、どう扱ってもらいたがっているか、そういうことは十二分に心得ていた。だから、電話で打ち合えた吉祥寺のスナックで待っていると、車でやってきた女とは、ただ目でうなずきあっただけで、席を立ち、女の車に乗ると、一直線にモーターへ紛れこんだのである。

「泊れないのよ」

ゆっくりと話しあうどころではなかった。室へ入ると同時に、女は西原に身体をすり寄せて、せき立てた。

脂肪の固い肌だった。

はけ口のない不満が全身に堆積し、どうしようもないくらいにしこりきってしまったという感じである。そんな、男を待ちあえいでいる女の皮膚は、西原がちょっと指先を這わせるだけで、たちまち汗を滲みだし、悶えた。

「はやく、おねがい……」

とろ火にかけて煮えてゆくような、間遠い前戯よりなによりも、四十歳を過ぎた小太りな女は、一気に全身を滾らせ、吹きこぼれさせようと、西原の「男」そのものを求めた。

好きな女……ではもちろんないし、確かな手順を迎える必要はなかった。闇雲に達したがっているのだから、そうしてやればよかった。西原の立場は、飢えきっている女を飲こばせ、サービスすること報酬……を得ようとする、これもいうならば商売であった。

開ききっている女の中へ埋めこむと、一瞬で狂う。

西原の胸の下で、固い脂肪のその丸い身体が弾むように躍り、氣を掻き立てようと懸命に息を詰め、西原の腰を思いきり抱えこみながら貪るように何度も達し、さらに溺れた。

「だめよ、まだ終っちゃだめよ」

「ぼくはだいじょうぶです」

「変えて……」

「え？……」

「ね、変えて」

女は西原の納まっていた部分を外すと、自分からベッドに這った。

室の灯りを消す暇もなかったから、西原の鼻先に満月のような女の腰が、肌にうつすらと赧味を泛かべてせり立った。

そこへ、じらし氣味に進める。女は、押しひしがれたように、喉を鳴らした。

はじめは、泊れないと言っていたはずの女は、済んでからも西原の部分をしっかりと握りしめ、一向にベッドを出ようとはしなかった。それも、ただ握っているというだけではなく、果てたばかりだというのに懸命に甦生させようと、揉みしごきつづけ、上体を起こすと、萎えたままの西原に、自分の下腹部を強引にすりつけ、納まってもいないのに、接触感だけのそんな格好で達しようとした。

朝までである。

モーターへ入ったのが夜の十一時頃だったから、三十一歳の西原も、六時間も七時間も休みなしにせがみつづける女の執拗さに、さすがに辟易した。

運び出さるが、金が必要だった。

百万円……。

それが無理なら、半分の五十万円でもいいし、いっぺんに五十万円が不可能だというなら、ぎりぎり十万円でもいい。つまり、できることなら百万円。多ければ多いほどいいがすくなくともやむを得ないし、その場合はいくらでもいい。とにかく金をつくらないことには、債鬼をなだめようのない、月末のギリギリなところへきていた。

「何時かしら」

それでも明け方に二、三十分くらい軽くまどろんだ女が、窓に映る陽光を感じ、慌てて身体を起こした。

「六時半です」

「いけないわ。子供を学校へ出してやらなければ大変なことになる」

叫ぶように言い、うろたえてベッドを滑り出た女は、だが、むき出しな西原の下腹部を一瞥すると、はっと西原を振向き、崩れるように床に膝を突いて顔を埋めこんだ。

「奥さん」

女のするままに萎なえている下腹部を預けながら、西原は低く言った。

「ああ、これ、これよオ……」

「ネ、奥さん」

「また、すこしなってきたわ」

「この間の話ですけど、小金井にちょうど手頃な店があるんですが」

「ほら、またよ、まただわ」

「聞いて下さい。駅前の商店街からはちょっと外れますが、とてもいいところなんです。権利金は百万円なんです、家賃はそれほど高くないし、あそこなら間違まちがいなく儲もちかります。出資していた

だいても、絶対に迷惑をかけることはないし、採算にあいます」

「もう一度、おねがい……」

「ですから」

「じらさないで。こんなになったっていうのに。もう一度して。いいでしょ。そのかわりお店のことは、考えておくわよ」

「しかし急がないとせっかくのチャンスを逃してしまいます。あれだけいい立地条件の店はそうそう出てこないし、ぐずぐずしていたらすぐに借りられてしまうと思うんです」

「そんなことより、ほら、こんなになったじゃないのよ」

女が再び顔を埋めこむ。

西原は、ツと腰を引いた。

「だめ！」

「ですから、真面目に考えてもらいたいです」

「ちゃんとしてくれなければいや」

「昨夜、四回も五回もしたはずです」

「おねがい、ネ、もう一度」

懸命な、詰めた声で言うと、女はベッドに這い上がって、西原に身体を合せた。下腹部を開き、腰を埋めようとする。西原は身体をずらしながら、眸の上がっている女を、下から見上げた。

「真面目な仕事の話です」

「ずらしちゃだめ」

「出資して下さらないなら、もういやです」

「おねがい。ほら、ネ、ネ……」

「どうなんですか」

「だって、今日は無理よ。この次。だからして！」

叫ぶように言つて、女は全身の力で西原にしがみついてきた。その拍子に、西原の部分は滑つて、女の熱い髪かみの中へ、深く滑つて埋まった。

二

電車を降りると、中央線国立駅のホームには、まだ朝の通勤客が溢れていた。

駅の時計はやつと八時を廻ったばかりである。

——早過ぎる。

つぶやくと、西原はホームを上がり、改札を出て、入れちがいに構内へとびこんでゆく人たちとぶつかりながら、寝不足と過剰サービスのためふらつく足取りで、さして広くもない北口の駅前広場へ踏みだしていった。五、六歩行つて、駅舎の陰の部分が切れたとたんに、箭やのように弾ける七月末の陽差しが、西原の瞳孔に襲いかかった。

痛いように眼が渗みる。

顔をしかめ、額に小手をかざした。

雲を払った夏の空が深く、暑い一日になりそうだ。

通勤客の流れとは逆方向のせいで、高木町へゆくバス停には、まったく人影がなかったが、西原はぼさぼさな髪に指を押し込んで掻き上げると、そのまま駅前広場を突切り、武蔵野特有の太い樺の樹陰を選びながら、乾いていて埃っぽい道を上がっていった。

バス代程度の小銭はあった。

だがこの時間では、まだ、孝子は色白な下半身をむき出しにして、だらしなく寝ているにちがいない。そんなところへ帰ろうものなら、いや味たっぷりの口調で詰られるだろうし、適当に言い逃れをしようとする、埋め合せだといってからみつかれ、せがまれる。いつもそうだったし、そんな姿は思ってみただけで暑苦しく、しんどかった。

それも、たとえ十万円でも、もし金策がついていたら、どうにでも言訳が通用したが、結局昨夜の女は、モーター代を払っただけで、さんざサービスをさせておきながら、帰りしなに、出資については、もうすこし考えてみると、煮えきらない返事しかなかった。

いまさら、そんな悠長なことを言われては困ると、一応は重ねて頼んでみたものの、モーター代も払えない懐具合を見すかされていたから、さすがの西原もそれ以上は強く迫ることができなかった。

見込み違いだった。

といって、見込み違いだからといってすませる余裕もない。

もう、孝子からはなにも出なかった。

孝子が金を出さないということではなく、東村山の近くの開業医の夫と別れ、西原と同棲しはじめて一年半で、孝子は持っていたものを、なにかも二人の同棲生活を維持してゆくために注ぎこんでしまったのだった。

西原の手を経由すると、どういうわけか、金は溶けるように消えていった。

自分でもどうしてなのかわからない。

孝子と同棲しはじめる直前の、つまり二年前、西原がそれまで運転手として勤めていた証券会社を蹴になった原因は、五百万円近い金を横領し、そのことが発覚してしまったためだったが、その金も、それまでたまっていた金融業者に一部返済したほかはなににどう使ったという記憶がない。

横領して、だが、あつという間に金がなくなっていた。
不思議だった。

それだけに、夫と離婚してまで、なにかも西原に注ぎこんでしまった孝子は、三十七歳という、三十一歳の西原より六歳年上ということもあって、嫉妬と憎悪のからんだ飢餓感で、西原との行為にぬめりこみ、行為の陶醉にだけ激しく執着してきていた。

それも、単純な飢餓感を通り越し、なにかも注ぎこんでしまったし、なにかもを喪ったという代償感もあって、情緒のバランスや、生活の感情を崩してしまっていた。

「わたしには、もうあんたのこれしかないのよ」

言いながら孝子は、西原の男の部分の口に含み、鋭く歯を当てて噛み切ろうとしたことがある。

「よせ、ばか！」

西原は慌てて孝子の顔を払い退けた。

足が触れても手がからんでも、孝子は身体を顫わせてもつれかかり、あえぐ眼や口まですべてが、濡れた性器という感じで、西原には怖くなる**こ**ろがあった。

金だった。

金さえあれば……。

白いオープンシャツの西原は、ハンカチで袴足を拭い、五叉路の神社前の坂を、吐息交りにゆっくりと時間をかけて上がった。

畑の中の、二十戸ほど二列に向かい合って並んだ建売りの四軒目。西原の足音を聞きつけた三匹の犬が、金網の囲いに足をかけ、激しく尾を振っている。メス犬のベルが、嬉しそうに喉を鳴らした。

その気配で起きたのか、不意に台所の戸が開いて、髪を乱したネグリジェ姿の孝子が、醒め